
第 75 回数理社会学会大会 (JAMS75) 自由報告 報告概要

日時：2023 年 8 月 25 日 (金) ～8 月 26 日 (土)

会場：愛知大学名古屋キャンパス

大会委員長：田麿裕祐 (愛知大学)

自由報告 I 第 1 部会

ジェンダーと家族

司会 脇田彩 (お茶の水女子大学)

8 月 25 日 (金) 9:30～11:10

(講義棟 3 階 L305 教室)

1 Understanding Mechanisms of the Marriage Market Mismatch in Japan

打越文弥 (プリンストン大学)

目的・方法

In this study, we use an experimental approach to eliminate biases and examine several potential explanations for declining marriage in Japan, a society characterized by declining marriage rates, rapid educational expansion, and highly differentiated educational systems allow us to speculate the marriage market mismatch by socioeconomic status.

結果・考察

Preliminary results found gender differences in ratings for fictitious spouse's educational attainment. This result is consistent with anecdotal evidence that the underrepresentation of women in selective colleges in Japan is associated with negative perceptions of highly educated women in the marriage market.

2 性交渉の頻度と家事分担が幸福度に及ぼす影響には相乗・相補効果があるのか

石橋拳 (専修大学大学院)

目的・方法

性交渉は幸福度に影響し、家事負担割合は性交渉の頻度や幸福度に影響を及ぼす。しかし、性交渉と家事負担の割合の関連が幸福度にどう影響を及ぼすのかは知られていない。そこで、男女別に、固定効果モデルを用いて性交渉の頻度と家事負担割合の交互作用項が幸福度に及ぼす影響を推定する。

結果・考察

結果として、女性の家事負担割合が多いと、性交渉をおこなうことが幸福度に正の影響があるけれども、家事負担が均等になると、性交渉を行うことの効果は弱くなる。したがって、家事の負担と性交渉には相乗効果があるのではなく、相補関係にあることが示唆される。

3 自己肯定感の規定因構造の男女差——学歴・職業・主観的地位に関する男女別の多母集団同時分析——

鳥居勇氣（立教大学大学院）

目的・方法

本研究では、学歴・職業・主観的地位に関する男女別の多母集団同時分析を行い、自己肯定感の規定因構造とその男女差を明らかにすることを目指す。分析には、2022年6月に村瀬洋一教授（立教大学）を中心に東京都で実施された調査データを使用した。

結果・考察

男性の場合は主観的地位について、女性の場合は仕事のヒト複雑性について、自己肯定感に対する直接的で有意な正の効果が示された。日本における経済面での男女格差の大きさが、自己肯定感の規定因の男女差に反映されていると推測される。

4 スキル利用のジェンダー不平等—スキル形成レジームに着目して—

鈴木健一郎（名古屋大学大学院）

目的・方法

本研究の目的はスキル利用に焦点を当てて PIAAC（国際成人力調査）を分析し、国際比較を行うことで、スキルとポジションのマッチングの観点からジェンダー不平等を明らかにすることである。

結果・考察

日本では子どもを持つ女性のスキル利用が抑制され、この不利は高スキル女性であっても克服されえないことが明らかになった。これはスキルとポジションのミスマッチによって、ジェンダー不平等が生成されていることを示唆するものである。

自由報告Ⅱ 第2部会
社会現象への計量的アプローチ
司会 稲垣佑典 (成城大学)
8月25日 (金) 9:30~11:10
(講義棟 3階 L306 教室)

1 Class Allocation and Learning Support Network Dynamics: A Stochastic Actor-Oriented Modeling Approach

Nobuo Suzuki (Iwate Prefectural University)

目的・方法

This study examines whether and how class allocation affects Learning Support Network (LSN) among Japanese university freshmen. In response to the research question, this study hypothesizes that only allocation to a Spring seminar class evolves an LSN among class members. Focusing on an exogenous class allocation system, this study analyzed data from a longitudinal whole-network survey of all freshmen within a single faculty at a university.

結果・考察

A stochastic actor-oriented model revealed that sparseness, reciprocity, transitivity, gender homophily, egos from the lower deviation of entering high school, the same high school, and the same Spring seminar class evolved LSN. Thus, this hypothesis was supported. In conclusion, the Spring seminar class, not the Fall seminar class, created LSN dynamics among freshmen.

2 韓国人に対する偏見への記述的規範の影響：サーベイ実験を用いた検証

○永吉希久子 (東京大学)

齋藤僚介 (大阪大学)

潮村公弘 (フェリス学院大学)

瀧川裕貴 (東京大学)

田辺俊介 (早稲田大学)

目的・方法

本研究の目的は、韓国人に対する偏見の顕在化の過程における、記述的規範の影響を検証することにある。オンラインニュース記事に対するコメントの多数派意見が、回答者の顕在的偏見に与える影響を検証するサーベイ実験を通じて、これを検証した。

結果・考察

分析から、韓国人への顕在的偏見は記述的規範によって影響を受け、その傾向は潜在的偏見の強い層よりも偏見の弱い層に現れる可能性が示された。さらに、法規制を認識することによって、多数派意見にかかわらず、顕在的な偏見が抑制される傾向が示された。

3 さまざまな信仰の組み合わせと祭への参加

○辻竜平 (近畿大学)
茅野恒秀 (信州大学)
相澤真一 (上智大学)
濱崎友絵 (信州大学)

目的・方法

人々がどのような宗教を信仰しているかによって、御柱祭に参加するかや、どの程度の深さで参加するかの程度は違ってくるのだろうか？ 本報告では、さまざまにありうる信仰の組み合わせに着目し、どの組み合わせが御柱祭への深い参加を促進するかを検討する。

結果・考察

小宮（近隣の神社）の氏子よりは諏訪大社の氏子であることが、諏訪大社の御柱祭への参加を促進することが示された。また、寺の檀家であることが、一律に諏訪大社の御柱祭への参加を促進することが示された。

自由報告Ⅲ 第3部会

数理モデル

司会 大浦宏邦 (帝京大学)

8月26日 (土) 09:00~10:40

(講義棟 3階 L305 教室)

1 ラカンの代数学

落合仁司 (同志社大学)

目的・方法

ラカンの人間にとって根源的な「シニフィアンの発話」と「対象 a の享楽」を群の作用と不動点の保存によって代数的に表現する。

結果・考察

代数的表現から財 (シニフィアンと対象 a) と行為者 (発話者と享楽者) の同型が帰結し、行為者の財への物象化の代数的な表現であると解釈される。

2 長期効果を考慮した学術生産モデル開発—実証可能性に留意しつつ—

○樊怡舟 (広島大学)

中尾走 (広島市立大学)

目的・方法

本研究の目的は、大学の学術生産 (論文生産等) について、当期の投入だけではなく、それまでの投入額を考慮したメカニズムを定式化し、そのうえで、時系列データによる実証分析に実装できるようなモデルを開発することにある。

結果・考察

本稿のモデルは、学術生産に対する大学の投資 (I) とそれによるリターン (R) を考慮している。前年度差や前年度比などの仕組みで、測定できない I と R を消去し、実質投入総額 Y と外部資金 S のみの関係を定式化した。そのうえで、本モデルに基づいて実証分析で推定な三つのパラメータのそれぞれの意味合いを検討した。

3 大学進学選択と経済的資産の関連：損失回避傾向の異質性に注目して

○毛塚和宏（国立社会保障・人口問題研究所）

鈴木遼（宮城県立泉松陵高校）

目的・方法

本報告の目的は、プロスペクト理論に基づき、資産と損失回避傾向の負の相関を仮定したとき、世帯における進学行動の意思決定がどうなるのか、特に、資産と受験に対する主観的成功確率、そして大学受験するか否かの関連を明らかにすることである。

結果・考察

- 1) 資産が大きいほど、主観的成功確率の進学する閾値は小さくなる。
- 2) 資産が一定のしきい値を超えなければ進学しない。
- 3) コストの減少は、資産・主観的成功確率の閾値を下げる効果がある。その影響は、受験時のコストのほうが合格後のコストより大きい。

4 Graph Coloring Problem in Dynamic Networks: A laboratory experiment

Yen-Sheng CHIANG (Institute of Sociology, Academia Sinica, Taiwan)

目的・方法

American Sociological Review recently published an interesting paper by Erikson and Shirado (2021) to theoretically unpack how the division of labor emerges in economic production. Their model is built the foundation of a famous challenge documented in computer science: the graph coloring problem (GCP). In this talk, I present a networked experiment with human participants to show that GCP can be solved more successfully when networks are dynamic than static.

結果・考察

First, at the macro level our experiment shows the kinds of networks that would evolve when GCP is solved successfully and efficiently. Second, at the micro level it demonstrates how players balance between switching neighbors and staying idle in order to reach to an optimal collective outcome of the GCP. Third, it reveals how people weigh the profiles of a candidate in deciding whom to delete from and whom to add to the neighbor list. Put together, these findings provide a clear picture of how dynamic networks promote the coordination of a population of agents with divergent characteristics.